様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００６６４

研究課題名（和文）複合判断・単独判断に基づく「主語」相対化の文法理論構築に向けた経験的基盤研究

研究課題名（英文）A fundamental study for building an empirically grounded grammtical theory on relativised subjecthood after "categorical/thetic judgment"

研究代表者
藤縄　康弘（Fujinawa, Yasuhiro）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：６０２５３２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本語のハとガの振舞いを例に Kuroda (1972) が言語学に導入した「複合判断」と「単独判断」という論理的対立をドイツ語学の立場から以下の 3 相で捉え直した。
(1) 複合判断・単独判断について，多分に日本語寄りの Kuroda (1972) の解釈を提唱者 Anton Marty に立ち返って再検討し，言語中立的かつ原典に忠実なかたちで定義し直す；(2)「主語」が鍵を握るさまざまな現象を統括するグランドデザインを示すことで，上述両範疇の言語学的関与性を裏づける；(3) 19世紀の埋もれた言語哲学の発想を採り入れることで現代の理論言語学の枠組みを再活性化する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来建設的な議論が難かった「文構成における主語の必要性」の問題を相対化し得る，より普遍性の高い「非デカルト派」文法理論の構築に向けた経験的基盤を整備した。20 世紀言語理論のトレンドであった理性主義とは逆方向の「言語が理性を可能にする」という言語観に立ち、これまで埋もれてしまっていた 19 世紀ドイツの言語論を再発見・再評価し，現代に相応しい言語理論への昇華を試みた。これにより，従来は潜在的矛盾を孕んでいた言語の普遍性と多様性の関係を「多様性こそ普遍性を動機づける」という方向に転換するとともに，AI による自動化がますます進行する今日に相応しい言語研究の新たな道標を提示した。

研究成果の概要（英文）：The logical opposition between "categorical" and "thetic" judgement, which had been introduced into linguistics by Kuroda (1972) on the basis of the function of "wa" and "ga" in Japanese, was investigated from a German linguistic point of view. The following three purposes were pursued: (1) to show how the two notions, rather Japanese-centrally interpreted by Kuroda and through him adapted to linguistics so far, can be redefined more language neutrally and more faithfully to the originals of Anton Marty; (2) to prove the linguistic relevance of the two notions by sketching a grand design to explain various "subject"-oriented phenomena in German; (3) to cast light on the idea of a forgotten language philosophy in the 19th century to provide a basis for reviving the frame of modern theoretical linguistics.
By relativizing the necessity of the subject even in a European language, the investigations have built a foundation for a more universal "Non-Cartesian" grammatical theory in future.

研究分野：人文学

キーワード：ドイツ語学　定性　数量化　存在文　情報構造　言語哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

主語が述語とともに文の構成に欠かせない要素であるという認識は，西欧言語学では自明であるが，日本語など他の言語を対象とする研究者のあいだでは懐疑的ないし慎重な見方が根強い。生成文法では度重なる理論的修正にもかかわらず「拡大投射原理（＝すべての文には主語がある）」(Chomsky 1982) が公理として一貫してきた一方，日本語学では仮に主語の存在が認められるにしても表面的に必須でないことから，三上 (1953) 以来の 「主語無用論」も一部でなお熱烈に支持されている。このような状況において主語の必要性を論ずれば，不毛な論争に陥るか，個別言語学の枠内に留まるかになりがちで，建設的な議論には発展し難く，言語体系によって主語の必要性に差異がある原因や作用を一般的に問えるには至っていない。

本件の議論が困難であるもうひとつの背景として，主語・述語関係の意味論への態度が総じて批判的でないことも挙げられる。意味論的に見た場合，述語は 1 ～ 数個の項を求める関係概念 R(x, y, …) であり，関与する項のうち最優位の x が主語であるとの認識が，上述の文法論的立場の如何を問わず，今日広く共有されていると思われるが，この認識に立つ以上，述語との対概念である主語は it rains のような「周辺的」ケースを除いて常に想定されることになる。その結果，主語の意味論はもっぱら複数の項が見込まれるケースでどの項がどのような動機によって最優位になるのかという広義の態の問題に帰着し，この関連で動作主性 (Dowty 1979) やトピック性 (Li and Thompson 1976)，際立ち (salience; Langacker 1991) などが主たる関心事となる。むろん，このような見方が即無効というわけではないが，こうした述語との関係性の陰で，意味論次元における主語の存在が無批判のうちに前提となってしまっていることには注意を要する。ちょうど古典物理学が空間を一種の座標軸として固定的に見なし，究明対象の埒外に置いていたように，現代の文法理論もある種の理性主義から出発する限りは，「主語と述語」という古典的理想像を分析に先立つ参照枠とする。その結果，現に「主語」の存在が疑われるさまざまな文法現象に直面してもその必要性への信念は揺らぎなく，当該現象はこの理想からの個別的・単発的な変異としか位置づけられないのである。

こうした現状から一歩踏み出すには，「主語・述語関係はそもそも意味論の次元で成立したりしなかったりし得る」という相対論への発想転換が肝要である。その際こうした発想を動機づけるものとして本研究が注目するのが，複合判断 (categorical judgement; kategorisches Urteil) と単独判断 (thetic judgement; thetisches Urteil) である。これはドイツ語圏スイスの哲学者 Anton Marty (1847-1914) が師 Franz Brentano (1838-1917) の心理学に基づいて提唱した論理学の範疇だが，その最大の特長は，アリストテレス以来の伝統的主述関係の具現化である前者に対し，後者をこの意味での「主語」を欠くものとして積極的に対置した点にある。この 2 つの判断は，形式論理学の台頭でその後一旦は忘れ去られかけたものの，Kuroda (1972) が Marty (1916) から引用し，日本語のハ・ガに関連づけて取り上げたことにより言語学で再び注目を集め，この間，一方では生成文法における VP 内主語仮説に結実し (Kitagawa 1986)，他方では個体レベル述語・ステージレベル述語 (Carlson 1977) と主語の指示性との相関性 (Ladusaw 1994) や文構造と情報構造の関係に関する新たな議論 (Sasse 2006) に刺激を与えている。もっとも Kuroda (1972) による日本語への適用は，彼独自の Marty 解釈に負うところが大きく，Marty 哲学が大胆にも秘めていた「主語」相対化への契機を事実上無に帰す結果ともなっている。

２．研究の目的

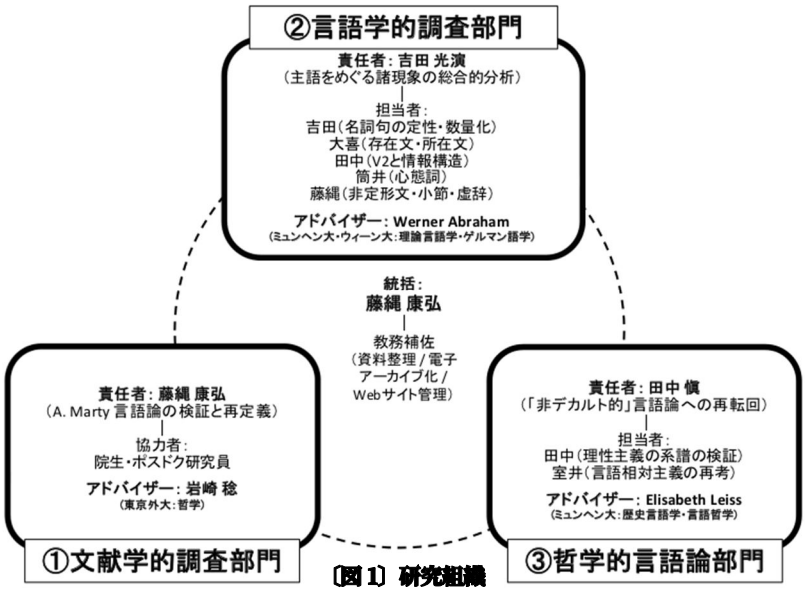
本研究は「主語」の範疇化をめぐって言語が多様である原因や作用を将来的には言語普遍論の問題として問えるようにするための基礎研究である。1. で指摘したような日本語の磁場を避けるべく，Marty が思考と例示に用いた言語であり，格や一致，語順，態などの形式的指標とその相互関係が可視的でもあるドイツ語を対象に，「『主語』の必要性はどんな原理に基づいているのか」を核心的な問題提起に据え，以下の 3 つの相でその解明を目指した：

(1) Marty が意図した複合判断・単独判断の本質を原典に遡って明らかにするとともに，構成性原理を踏まえ，現代言語学の議論に堪え得るかたちで定義し直す。
(2) 従来ドイツ語学において「主語」との関連で重要な性質が観察されてきたさまざまな言語現象のうち，予備調査（Tanaka, Leiss, Abraham and Fujinawa 2017）の結果から両種判断の質的関与性が強く示唆されるもの （名詞句の定性・数量化，存在文，繋辞，虚辞，V2，法，心態詞，非定形文，小節等） に注目し，複合判断に対する単独判断という主語の存在論に関わる新たな観点がこうした現象を記述・説明する上でどれだけの妥当性を持つのかを経験的に確かめる。
(3) (2) の成果を踏まえ「非デカルト派」の立場から言語相対主義に光を当て，このやや時代遅れの思潮を現代に相応しい健全な（＝普遍性を指向する）姿で再生する展望を示す。

この目標設定の基底には「言語は本当に理性によって可能になっているのか，それとも言語が理性を可能にしているのか」という根源的な問題意識がある。その限りで本研究は，「非デカルト派」言語学への経験的第一歩を目指すものでもあった。

３．研究の方法

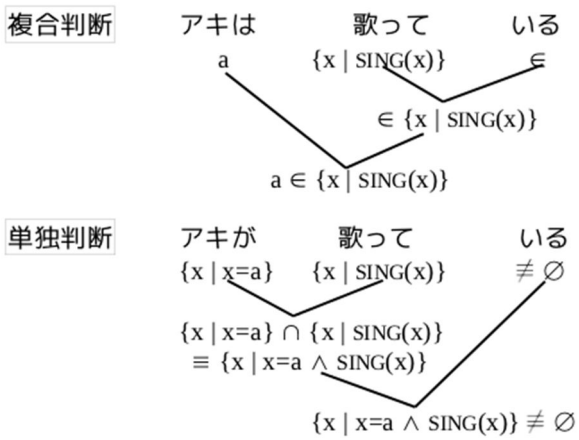
上記の目的を遂行するため，ドイツ語学における文献学的な方法論と理論言語学的な方法論とを組み合わせた多元的・総合的なアプローチを採用した。Marty (1916) が思考と例示に用いた言語であるドイツ語に携わる国内外の研究者を代表者・分担者・協力者として組織し，2. に示した 3 相に対応する 3 つの研究部門を設けて〔図 1〕のようにネットワーク状に組織し，各部門に科研費研究代表者の実績を有するメンバー 3 名を責任者として配置するとともに，アドバイザーという立場で 3 名の研究協力者を置くことにより，有機的・機動的に対処できる体制で調査・研究に臨んだ。



〔図 1〕研究組織

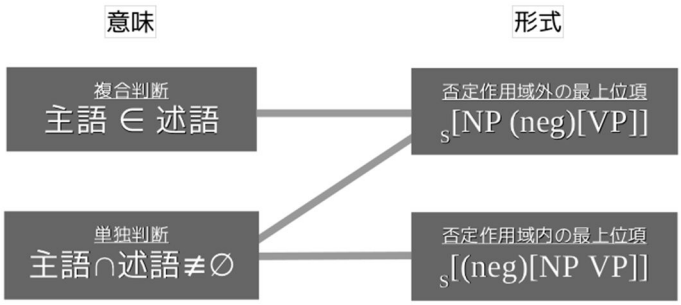
４．研究成果

(1) 遺稿を含む Marty の原典精査を通じ，彼の理論が実在主義と概念主義の共存を目指しており，複合判断は実体の存在を前提にした述定，単独判断は主述の統合概念に対応する実体の存在認定として〔図 2〕のように構成的に構想されていたことが確認された。



〔図 2〕複合判断と単独判断の構成性

(2) 名詞句の定性・数量化をはじめ対象となるドイツ語の各現象について，「理想的」主語の存在に合致する面とこれに反する面とをあらためて整理し，後者の面が多かれ少なかれ単独判断の影響下にあることを明らかにした。あわせて純粋に単独判断を示す表現形式がどの程度ドイツ語に存するのかも確認し，複合性・単独性をめぐる意味と形式との関係に〔図 3〕のような非対称性（意味的単独性が形式的複合性によって示されることはあっても，形式的単独性が意味的複合性を示すことはない）が成り立つことを立証した。



〔図 3〕複合性・単独性をめぐる意味・形式間の非対称的関係

(3) 言語事実に鑑みた複合判断・単独判断の記述は，純粋に経験的というよりも，演繹的論理的な考察を経験的に裏づけるという意味でのアブダクション的なプロセスによって当該概念を位置づける作業であること，これによって Leiss (2009) が提唱する「言語学的再転回」（“linguistic return” = 言語学から哲学への寄与）としての哲学的言語論が可能であることを，日独対照言語学への「非デカルト的」構想を提示することによって実地に示した。

〈参考文献〉

Carlson, Gregory N. (1977): *Reference to Kinds in English*. Ph.D. thesis. Amherst: University of Massachusetts (published in 1980 in New York: Garland).

Chomsky, Noam (1982): *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Cambridge, Massachusetts: MIT.

Dowty, David (1979): Thematic Proto-Roles and Argument Selection, *Language* 67(3), 547-619.

Kitagawa, Yoshihisa (1986): *Subjects in Japanese and English*. Ph.D. thesis. Amherst: University of Massachusetts.

Kuroda, S[ige]. Y[uki]. (1972): The categorical and the thetic judgment: Evidence from Japanese syntax, *Foundations of Language* 9: 153–185.

Ladusaw, William A. (1994): Thetic and categorical, stage and individual, weak and strong, *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory* IV, 220–229.

Langacker, Ronald W. (1991): *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2*: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Leiss, Elisabeth (2009): *Sprachphilosophie*. Berlin and New York: de Gruyter.

Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. (1976): Subject and Topic: A New Typology of Language, *Subject and Topic*, Charles N. Li. (ed.), New York: Academic Press, 457–490.

三上章 (1953):『現代語法序説』刀江書院（復刊 1972 くろしお出版）.

Sasse, Hans-Jürgen (2006): Theticity, *Pragmatic Organization of Discourse in the Languages of Europe*, Giuliano Bernini and Marcia L. Schwartz (eds.), Berlin and New York: de Gruyter, 255–308.

Tanaka, Shin, Elisabeth Leiss, Werner Abraham and Yasuhiro Fujinawa (eds.) (2017): *Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik*. Hamburg: Buske.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　20件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 藤縄康弘	４．巻 －
２．論文標題 Video, ergo sum ―「知覚動詞＋ACI（不定詞付き対格）」構文における「主語」をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―』藤縄康弘［編］（日本独文学会研究叢書 Nr. 150）	６．最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤縄康弘	４．巻 －
２．論文標題 現代ドイツ語の時制とアスペクト―完了時制と過去時制における参照時と事象時をめぐって―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座 ―成田節教授退職記念論文集―』カン ミンギョンほか［編］	６．最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤縄康弘	４．巻 166
２．論文標題 語彙の実態から文法の本質へ ― 経験的な言語普遍論研究に資する独英語対照言語学の試み ―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ドイツ文学	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田光演	４．巻 －
２．論文標題 存在文と所在文における sein の構造と意味 ― 存在動詞としての sein	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―』藤縄康弘［編］（日本独文学会研究叢書 Nr. 150）	６．最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉田光演	4．巻 34
2．論文標題 ドイツ語存在表現の統語論と意味論	5．発行年 2022年
3．雑誌名 広島ドイツ文学	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中愼	4．巻 －
2．論文標題 Manche Tiere halten Winterschlaf：「定」判断の言語化	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―』藤縄康弘［編］（日本独文学会研究叢書 Nr. 150）	6．最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中愼	4．巻 －
2．論文標題 逸脱のピュシス　文法規則の逸脱に見られる自然性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『ノモスとしての言語』大宮勘一郎・田中愼［編］	6．最初と最後の頁 309-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中愼	4．巻 －
2．論文標題 Ueber die grammatische Perspektivierung：文法による視点化について／を超えて	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座 ―成田節教授退職記念論文集―』カン ミンギョンほか［編］	6．最初と最後の頁 18-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shin Tanaka	4．巻 166
2．論文標題 Am Nordeingang des rechten Vordergebaeudes: Zur Vielfalt der sprachlichen "Perspektivierung"	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ドイツ文学	6．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoshiyuki Muroi	4．巻 ー
2．論文標題 Detransitivitaet und Modalitaet im Deutschen und im Japanischen	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Tagungsband der "Asiatischen Germanistenta-gung 2016 in Seoul", ed. by Seong-Kyun Oh, et al.	6．最初と最後の頁 153-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 筒井友弥	4．巻 ー
2．論文標題 複合判断の表出に見る度量詞 allein の機能再考	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―』藤縄康弘［編］（日本独文学会研究叢書 Nr. 150）	6．最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大喜祐太	4．巻 ー
2．論文標題 es gibt の二面性：複合判断・単独判断の観点から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『複合判断・単独判断とドイツ語文法 ―定性を軸に―』藤縄康弘［編］（日本独文学会研究叢書 Nr. 150）	6．最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井坂ゆかり	4．巻 －
2．論文標題 相関詞da(r)+前置詞はいつ現れるのか ― 動詞 warten の相関詞 darauf を例として ―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座 ―成田節教授退職記念論文集―』カン ミンギョンほか［編］	6．最初と最後の頁 126-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yasuhiro Fujinawa	4．巻 －
2．論文標題 Pseudocategorical or purely thetic? A contrastive case study of how thetic statements are expressed in Japanese, English, and German	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Thetics and Categoricals, ed. by Werner Abraham, Elisabeth Leiss, and Yasuhiro Fujinawa	6．最初と最後の頁 284-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yasuhiro Fujinawa	4．巻 －
2．論文標題 Thetik: Wie sie zu einer Exklamation fuehrt	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz: Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo, ed. by Yoshiyuki Muroi	6．最初と最後の頁 759-766
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉田光演	4．巻 33
2．論文標題 thetisch oder kategorisch: ドイツ語・日本語における主語の姿	5．発行年 2020年
3．雑誌名 広島ドイツ文学	6．最初と最後の頁 17-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Shin Tanaka	4．巻 —
2．論文標題 Artikel als Markierung der Ambienz	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Form, Struktur und Bedeutung. Festschrift fuer Akio Ogawa, ed. by Hiroyuki Miyashita, Yasuhiro Fujinawa, and Shin Tanaka	6．最初と最後の頁 183-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 Yoshiyuki Muroi	4．巻 —
2．論文標題 Adjectives and mode of expression: Psych-adjectives in attributive and pre-dicative usage and implications for the thetic/categorical discussion	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Thetics and Categoricals, ed. by Werner Abraham, Elisabeth Leiss, and Yasuhiro Fujinawa	6．最初と最後の頁 243-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 大喜祐太	4．巻 67
2．論文標題 独英存在構文の文体的特徴に関する一考察 ： テクスト内の結束性に着目して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 文体論研究	6．最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 Yasuhiro Fujinawa	4．巻 -
2．論文標題 Kategorik und Thetik als Basis fuer Sprachvergleiche - dargestellt am Beispiel einer kontrastiven Linguistik des Deutschen und des Japanischen	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Zur Architektur von Thetik und Kategorik: Deutsch, Japanisch, Chinesisch und Norwegisch	6．最初と最後の頁 169-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 藤縄康弘	4．巻 -
2．論文標題 擬似複合判断文としての総称文―「花は咲く」の意味論的考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『学際的科学としての言語学研究　吉田光演教授退職記念論集』	6．最初と最後の頁 181-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shin Tanaka	4．巻 -
2．論文標題 Thetik und Kategorik als funktionale Kategorie: Funktional-universale Struktur des Satzes	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Zur Architektur von Thetik und Kategorik: Deutsch, Japanisch, Chinesisch und Norwegisch	6．最初と最後の頁 149-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中愼	4．巻 -
2．論文標題 定性をめぐって　ドイツ語と日本語の「主語」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『学際的科学としての言語学研究　吉田光演教授退職記念論集』	6．最初と最後の頁 105-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoshiyuki Muroi	4．巻 -
2．論文標題 Zustand und Eigenschaft, Subjektstaerke und Salienz: Thetik-Kategorik beim Gefuehlsadjektiv im Deutschen und Japanischen	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Zur Architektur von Thetik und Kategorik: Deutsch, Japanisch, Chinesisch und Norwegisch	6．最初と最後の頁 243-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 筒井友弥	4．巻 -
2．論文標題 度数詞nurとalleinの意味的スケールに関する一考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『学際的科学としての言語学研究　吉田光演教授退職記念論集』	6．最初と最後の頁 359-377
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 筒井友弥	4．巻 -
2．論文標題 ドイツ語のとりたて表現	5．発行年 2019年
3．雑誌名 野田尚史〔編〕『日本語と世界の言語のとりたて表現』東京：くろしお出版	6．最初と最後の頁 275-291
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大喜祐太	4．巻 37
2．論文標題 書きことばにおける es gibt 存在表現の使用　コーパス調査を手がかりにして	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要』	6．最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤縄 康弘	4．巻 97
2．論文標題 複合判断と単独判断―アントン・マルティの言語論再考	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『東京外国語大学論集』	6．最初と最後の頁 43-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuta Daigi	４．巻 50
２．論文標題 Lokalitaet, Faktizitaet, Angebot, Einfuehrung: Verschiedene Aspekte der deutschen Existenzaussage	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本独文学会東海支部『ドイツ文学』	６．最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計30件（うち招待講演　1件／うち国際学会　16件）

１．発表者名 藤縄康弘
２．発表標題 完了時制 vs. 過去時制－ドイツ語研究から省みる
３．学会等名 日本英語学会第40回大会における公開シンポジウム「英語の常識・世界の言語の非常識：英語学の知見が個別言語の研究に与える正の影響と負の影響」
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉田光演
２．発表標題 ドイツ語の存在表現の意味と構造について
３．学会等名 第102回広島独文学会研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田光演
２．発表標題 存在文と所在文におけるseinの構造と意味 ― seinは存在動詞かコピュラか？
３．学会等名 日本独文学会2021 年秋季研究発表会におけるシンポジウム「複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shin Tanaka
２．発表標題 Logisch-pragmatische Momente in der Syntax: 'Thetik/Kategorik' als funktional-universale Prinzipien des Satzes
３．学会等名 XIV. Kongress der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shin Tanaka
２．発表標題 Rettet das Subjekt! Subjekt als Drehpunkt allgemeines Semiose-Prozesses
３．学会等名 Linguisten-Seminar online 2021 der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shin Tanaka and Shiori Yokota
２．発表標題 Was wird gesendet und wie wird es empfangen?: Zur Unterdeterminiertheit der sprachlichen Ausdruecke
３．学会等名 48. Linguisten-Seminar der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 筒井友弥
２．発表標題 度数詞 nur の対応訳に関する一考察
３．学会等名 京都外国語大学ドイツ語学科研究会（WEG）第21回研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 筒井友弥
２．発表標題 nurとダケ・シカの意味的な類似性について
３．学会等名 第102回広島独文学会研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tomoya Tsutsui
２．発表標題 Eine kontrastive Analyse der deutschen und japanischen Fokuspartikeln - Semantische Affinitaeten zwischen nur und dake, sika
３．学会等名 XIV. Kongress der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大喜祐太
２．発表標題 es gibtの二面性 ―複合判断・単独判断の観点から
３．学会等名 日本独文学会2021 年秋季研究発表会におけるシンポジウム「複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yasuhiro Fujinawa
２．発表標題 Praedikation und infinite Komplemente bei glauben und finden
３．学会等名 Linguisten-Seminar online 2020 der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤縄康弘
２．発表標題 Video, ergo sum ― ACI（不定詞付き対格）構文における「主語」をめぐって
３．学会等名 日本独文学会2021 年秋季研究発表会におけるシンポジウム「複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yasuhiro Fujinawa
２．発表標題 'Kategorisch' vs. 'thetisch' und das Seinverb: ein deutsch-japanischer Vergleich
３．学会等名 Forschungskolloquium der germanistischen Linguistik WS 2021/22 at the University of Tuebingen, Germany（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 筒井友弥
２．発表標題 複合判断の表出に見る度数詞alleinの意味機能の再考
３．学会等名 日本独文学会2021 年秋季研究発表会におけるシンポジウム「複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 大喜祐太
２．発表標題 独英存在表現の文体比較 ―テクスト内の結束性に着目して
３．学会等名 日本文体論学会第 116 回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yasuhiro Fujinawa
２．発表標題 Generische Saetze im Deutschen und Japanischen: Von einem sprachtypologischen Kontrast zu einer sprachphilosophischen Synthese
３．学会等名 "Die Sprache in ihrem Werden", Jubilaeumskolloquium zu Ehren von Professor Michail Kotin und Professor Elizaveta Kotorova, held at University of Zielona Gora, Poland（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuhiro Fujinawa
２．発表標題 Flowers will bloom: Zur Artikellosigkeit von generischen Saetzen
３．学会等名 47. Linguisten-Seminar der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuhiro Fujinawa
２．発表標題 Thetik: Wie sie zu einer Exklamation fuehrt
３．学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田光演
２．発表標題 thetisch vs. kategorisch - ドイツ語・日本語における主語の姿 -
３．学会等名 広島独文学会第100回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shin Tanaka
２．発表標題 Artikel als Markierung der Ambienz
３．学会等名 47. Linguisten-Seminar der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shin Tanaka
２．発表標題 Versuch zur Vereinheitlichung divergierender Subjektbegriffe: Kodierung von "Thetik" und "Kategorik"
３．学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 室井禎之
２．発表標題 ドイツ語のコプラの叙述機能と日本語におけるその対応現象
３．学会等名 北海道ドイツ文学会第87回研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 筒井友弥
２．発表標題 nur, alleinと「だけ」「しか」の対応について
３．学会等名 広島独文学会第100回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 筒井友弥
２．発表標題 度数詞nurとalleinの意味機能 - 代替のスケールに注目して -
３．学会等名 京都ドイツ語学研究会第99回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomoya Tsutsui
２．発表標題 Ueber die Skala der Gradpartikeln nur und allein
３．学会等名 47. Linguisten-Seminar der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuhiro Fujinawa
２．発表標題 Do "pseudothetic" sentences exist? A German-Japanese contrastive approach to an unknown syntax-semantics-asymmetry
３．学会等名 Societas Linguistica Europaea（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shin Tanaka
２．発表標題 “B-grade subjects” and theticity
３．学会等名 Societas Linguistica Europaea（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shin Tanaka
２．発表標題 Eine an Universalitaet orientierte Textgrammatik: Satzaufbauprinzipien aufgrund der Thetik-Kategorik-Distinktion
３．学会等名 44. Oesterreichische Linguistiktagung（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoshiyuki Muroi
２．発表標題 Adjective and predication type: Psychadjectives in attributive and predicative usage in German and Japanese
３．学会等名 Societas Linguistica Europaea（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomoya Tsutsui
２．発表標題 Die Uebersetzungsmoeglichkeiten der deutschen und japanischen Fokuspartikeln -- nur, allein und dake, sika
３．学会等名 46. Linguisten-Seminar（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計8件

１．著者名 大宮勘一郎・田中　愼	４．発行年 2022年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 344
３．書名 ノモスとしての言語	

1．著者名 藤縄康弘［編］	4．発行年 2022年
2．出版社 日本独文学会	5．総ページ数 81
3．書名 複合判断・単独判断とドイツ語文法 ― 定性を軸に ―	

1．著者名 カン ミンギョン・時田伊津子・藤縄康弘［編］	4．発行年 2023年
2．出版社 同学社	5．総ページ数 258
3．書名 ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座 ―成田節教授退職記念論文集―	

1．著者名 Hiroyuki Miyashita, Yasuhiro Fujinawa, and Shin Tanaka [eds.]	4．発行年 2020年
2．出版社 Stauffenburg	5．総ページ数 471
3．書名 Form, Struktur und Bedeutung. Festschrift fuer Akio Ogawa	

1．著者名 Werner Abraham, Elisabeth Leiss, and Yasuhiro Fujinawa [eds.]	4．発行年 2020年
2．出版社 John Benjamins	5．総ページ数 390
3．書名 Thetics and Categoricals	

１．著者名 Werner Abraham, Elisabeth Leiss, and Shin Tanaka [eds.]	４．発行年 2020年
２．出版社 Tuebingen: Stauffenburg	５．総ページ数 352
３．書名 Zur Architektur von Thetik und Kategorik: Deutsch, Japanisch, Chinesisch und Norwegisch	

１．著者名 田中雅敏・筒井友弥・橋本将［編］	４．発行年 2020年
２．出版社 東京：ひつじ書房	５．総ページ数 416
３．書名 『学際的科学としての言語学研究　吉田光演教授退職記念論集』	

１．著者名 田中 愼	４．発行年 2019年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 259
３．書名 『断絶のコミュニケーション』高田博行・山下仁［編］「そもそもコミュニケーションは成り立っているのか? --「言語の檻」を超えるしくみ」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

複合判断・単独判断（科研費基盤研究B）
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/fujinawa/kaken/18H00664/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　光演 (Yoshida Mitsunobu) (90182790)	広島大学・総合科学研究科・名誉教授 (15401)	
研究分担者	田中　愼 (Tanaka Shin) (50236593)	慶應義塾大学・文学部（日吉）・教授 (32612)	
研究分担者	室井　禎之 (Muroi Yoshiyuki) (60182143)	早稲田大学・政治経済学術院・教授 (32689)	
研究分担者	筒井　友弥 (Tsutsui Tomoya) (90554189)	京都外国語大学・外国語学部・准教授 (34302)	
研究分担者	大喜　祐太 (Daigi Yuta) (60804151)	近畿大学・総合社会学部・准教授 (34419)	
研究分担者	井坂　ゆかり (Isaka Yukari) (20878467)	東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師 (12603)	2021年11月より参画

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	アブラハム　ヴェルナー (Abraham Werner)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ライス　エリーザベト (Leiss Elisabeth)		
研究協力者	岩崎　稔 (Iwasaki Minoru)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Frames 3.0 - Sind alle menschlichen Konzepte Frames? (held on Sep 11, 2019, at Tokyo University of Foreign Studies)	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ミュンヘン大学	デュッセルドルフ大学	テュービンゲン大学	
オーストリア	ウィーン大学			